滝 koh

月刊俳句誌

令和2年10月1日発行
（毎月1回1日発行）
第15巻第10号　通巻172号

10月号

2020

一山一寺

主宰作品

増成栗人

茶粥喰うべよ斑鳩の送り梅雨

つぎつぎと生れ蜘蛛の子の風に乗る

父と子の音色の違ふ草の笛

草蜉蝣やはらかな雨来てゐたり

一瀑が一山の音奪ひけり

どの谿に入るも筒鳥ほととぎす

八月の騒雨が溶かす山の色

盆三日遠州灘の波太鼓

手庇の遠くに蘆を焚くけむり

一山一寺魚板打つ音涼しかり

草刈つて刈つて盆道作りけり

人は人夏百日の寺にゐる

終戦の日をとんばうと水の辺に

俳誌のサロン

千屈菜がいには野の風呼びにけり　横尾かんな

雲駈けよ史書十三巻のお風入　石垣真理子

風の日は風に乗りくる草の絮　広瀬　弘

湯引き鱧かたへに砥部の手塩皿　林　未生

八十路とはB面の夏籠りゐる　駒井ちえ子

太宰忌の潮騒が夜を深めくる　水谷はや子

葭雀日暮はものを見たくなる　藤原明美

新緑に染まり一人となる木椅子　山岸明子

小糠雨なんぢやもんぢやの花が散る　伊藤真代

草蜉蝣抑留されし父のこと　北川博司

増成栗人　選

俳誌のサロン

作品抄

空蟬の山見えるまで登りしか　花本智美

牡丹に白とも違ふ白のあり　渡辺とくゑ

浜木綿や網の一目を繕うて　北村　操

思はざる検診結果梅雨月夜　佐藤あさ子

母の手の指輪のビーズ梅雨に入る　井上つぐみ

五月雨を聴く濠端のテラス席　鈴木　崇

涼しさは寂しさに似て竹に雨　吉清和代

思ひきりショートヘアーに切りて夏　中川幸恵

アイライン濃いめに引きて麦の秋　佐藤慧美子

老鶯のこゑ一山を潤しぬ　立石まどか

荒川心星

古代蓮

山法師朝の鳥語のひとしきり
百の薔薇二百の薔薇が香を放つ
蘆真青なり葭切の隠れ鳴き
声を掛けたし群生の水芭蕉
雨蛙介護の妻のよく眠る
花著莪に木洩れ日が降る鳥語降る
古代蓮水郷の日を一点に
破れ傘吾に木蔭といふ処

半谷洋子

蟻一匹

蟻一匹踝のぼる我鬼忌かな
土用太郎声出して己励ます
遠雷や手縫ひの糸の十二色
ビー玉のやうな猫の目送り梅雨
遠き蟬夕風どきを買ひ足しに
ほととぎす百段の磴下りるとき
今朝秋や思はぬ人が夢に出て
逝く夏の青空すこし濁りけり

第六回「鴻」俳句賞

入　選

第一位	「何もなき日」	井上　つぐみ
第二位	「桜隠し」	相川　健
第三位	「東京の鷗」	森　祐司
第四位	「春立てり」	安食　哲朗
第五位	「初夏の風」	田邑　利宏
第六位	「ふと匂ふ」	霜鳥　和子
第六位	「白馬村」	足立　枝里
第八位	「肥後菖蒲」	針谷　忠郎
第九位	「三　月」	花本　智美
第十位	「ラムネ菓子」	鈴木　崇

谷口摩耶

ほのぼのと

ほのぼのと会津生まれの桃を剥く

覚えなき瘡蓋（かさぶた）のあり夜の秋

寄せ返す波のごとくに蟬しぐれ

白さるすべり突風に散らされて

遅ればせながら迎へ火焚きにけり

墓参り夫の読経の声の中

度の合はぬ眼鏡となりぬ秋暑し

人間ドックの結果が届く残暑かな

俳誌のサロン

第六回「鴻」俳句賞　受賞作品

1位

何もなき日

井上つぐみ

真つ新な今日のはじまり福寿草
春浅し動物園のがらんどう
静かなる象のまばたき余寒なほ
樹の上のきりんの餌箱風光る
あをき香は薙ぎ倒されし水仙花
蟻穴を出でて迷はず進みたり
日溜りの光を吸ひし梅の白
萩焼の糸底の切れ冴返る
宇宙ステーション一直線に春の宵
春時雨何もなき日のハーブティー

デイサービス八の字眉の紙雛
合掌し母と菜の花辛子和
白木蓮衍のやうに昼の月
春朝の母の病室遠嶺晴
退院の道の連翹雪柳
花辛夷風に濃淡ありにけり
朧夜の母に寄り添ふ縫ひぐるみ
風あたたか櫟一樹に抱かれて
車椅子の傍へに屈み花月夜
飛花落花今日の終りの深呼吸

2位

桜隠し

相川　健

駅出でて桜隠しの雪となる
風光る越の白嶺の伏流水
辛夷咲く農事日誌に父のメモ
龍天に天金の書を開くとき
初蝶来弁財天に続く道
水鏡して芽柳のうすみどり
柿若葉日を浴びて身を透かしゐる
椎大樹緑は色を濃くしたり
青嶺聳つ甲斐にはんなり朝の月
変はることにいささか倦みし四葩かな
腕白には腕白の夢赤とんぼ
白桃のはちきれさうな円みかな
月青し酒一盞とボサノバと
釣人のまつ赤な帽子鵙の晴
湖一望冬青草のやはらかき
硝子戸越しに鯉の金色漱石忌
古代朱の椀に盛られし京雑煮
白木蓮どの花もいま空を向く
陽炎や摑みどころのなき一生
桜咲くただごとならぬ世なれども

3位

東京の鷗

森　祐司

亀鳴くやまた来るインカ黄金展
スウィーツの店に行列山笑ふ
柳絮飛びをり豆腐屋の代替り
交雑の鉄路ざはざは春の宵
二十三区おのもおのもの花吹雪
半夏生坂の途中の骨董屋
証券街に汗拭くための影を借る
埋め立ての海より白雨駆け上がる
香水の瓶のいろいろ明易し
土用太郎むかしの色の神田川
唐辛子利かせるパスタ首都の夕
日本橋を南へ一歩小鳥くる
高々とからくり時計黄落期
十三夜埠頭に蛎蠣が水を吐く
竜淵に写楽の顔をして銀座
東京の鷗に朝の日差して冬
電飾を尽くして立木凍らせり
木菟鳴くや川のどちらも大学府
月ほどに淋しオーバーの襟立てる
言の葉喉まで冬ざれの摩天楼

4位

春立てり

安食哲朗

曼荼羅を枕辺に置き春立てり
春は名のみや空つぽの薬瓶
茂吉忌と同じ龍太忌梅真白
蒼天の欠片と思ふ犬ふぐり
水温む硬い石から喋り出す
薇のほどけ言霊放たるる
味噌汁も蕨の頃となりにけり
自在なる空を得るまで白辛夷
吾が薄き影を追ひつつ青き踏む
言へぬまま電車見送る春の虹
桃の花咲かすは何の下ごしらへ
どの家も桜どの家とも疎遠
戸惑ひのなかや桜の始発駅
万葉の音読会や花筵
豆の花ひと日からりと日が落ちる
春深く琥珀に蟻のゐる静寂
囀りの空に継ぎ目のなかりけり
畦土や春三日月の踏みごこち
髪切つて女の嗤ふ春の闇
夜半の春聖書の中にある答

第六回「鴻」俳句賞

選評

増成栗人主宰　選

第一位　桜隠し

駅出でて桜隠しの雪となる
龍天に天金の書を開くとき
腕白には腕白の夢赤とんぼ
古代朱の椀に盛られし京雑煮

応募作品中、二十句を通して一番纏っているこの「桜隠し」を選んだ。殆どの句に人きな疵はない。その中で旅の句、暮らしの句のそれぞれに作者の感覚が光彩を放っている。花どきの雪の物語性、著者が大事な書として施した天金の書物、身ほとりの子供たちの夢への誘い、新しい作者の十七音への道程が見えてくる。

第二位　何もなき日

真つ新な今日のはじまり福寿草
静かなる象のまばたき余寒なほ
萩焼の糸底の切れ冴返る
花辛火風に濃淡ありにけり

動物園があり、暮らしの切り取りがあり、また母との交流がある。それぞれの角度で対象と自分との融和があり、作者なりの詩情もある。後半に若干の常套的な作品が見えたことが惜しまれる、総体的に季語の斡旋が上手な作家で、さりげない寧けさが全篇に行き渡る作品群であった。

第三位初　夏の風

バーボンをロックで朧月夜かな
よきことのふたつ明るき桃の花
畏人館街でドイツパン買うて春
あの頃のカーペンターズ初夏の風

少し伝統的なものと、現代という時代に向けてのまなざしが交錯する。その中で後者の作品に惹かれている。異人館街のドイツパン、かつてのアメリカン・ポップスを回顧しての作品に新鮮なときめきを覚えている。やや仏統的なものを詠った句とのギャップに、若干の迷いが見えるのが惜しまれる。

第四位　白馬村

子雀のたまり場となる湯屋の屋根
ホームより墓を見てをり花時雨
裏口にシーツ積み上ぐ夏館
昨日雪今日また吹雪クリスマス

長野・北安曇郡の白馬山麓周辺での作品。一つ一つ周囲のたたずまいを撮し、景を自らの中の詩的感覚で受け止め、素朴に親しみ易く詠っている．視覚を通した対象把握が作者の句作りの原点。おとなしい作品群だが、この山里の暮らしが美しく語られている。

第五位　春立てり

曼荼羅を枕辺に置き春立てり
蒼天の欠片と思ふ犬ふぐり
自在なる空を得るまで白辛夷
どの家も桜どの家とも疎遠

採れる句と採れぬ句が、はっきりと分かれている。犬ふぐりを蒼天の欠片だと言う物語性には納得。反面素朴な暮らしを詠った句は常套性があり、無理もある。特に後半の句に息切れの感があり、もう一歩推敲の欲しい作品であった。

他に「三月」にも注目したが、全体に句が流れておりきちんと言い切る努力が必要。

応募してくれた諸氏の全てに拍手。俳句は捨てる数で作家の力量が決まる。即ち、日頃の研鑽が大切。更なる研鑽を祈りたい。

荒川心星　選

第一位　春立てり
第二位　何もなき日
第三位　桜隠し
第四位　初夏の風
第五位　三月

「春立てり」

曼荼羅を枕辺に置き春立てり
吾が薄き影を追ひつつ青き踏む
春深く琥珀に蟻のゐる静寂

己が暮らしを己が感性で捉えていて作者の個性が見える。それぞれに明るいプラス思考で詠まれており、読んでいて一体感を覚える作品が多く、快き読後感がある。

「何もなき日」

春時雨何もなき日のハーブティー
朧夜の母に寄り添ふ縫ひぐるみ
車椅子の傍へに屑み花月夜

前半が吟行句、後下が暮らしの作品。ことに後半の母との交流の句に惹かれた。人の世には喜怒哀楽がある。その機微の揺れようが美しく描き出されている。

「桜隠し」

駅出でて桜隠しの宵となる
柿若葉日を浴びて身を透かしゐる
硝子戸越しに鯉の金色漱石忌

一句一句に作者の物語がある。リズム感のよき美しい表現が、そのまま作者の息遣いのように届く、静かな詩情を覚える作品。

「初夏の風」

歩かうか羽の国雫の降る街を
里山のものの芽の音水の斤
よきことのふたつ明るき桃の花

写実と詩的感覚の人り混じった表現で暮らしの実感を上手に捉えている。独創的な発想の句もあり、作者のロマンが見え隠れしている作品である。

「三月」

下萌えの土やはらかく香りをり
冴返る転勤の友見送りて
弥生尽ひとりオフィスの灯を消して

無理をしない表現で身ほとりの暮らしに眼を凝らす。容易な言葉で、容易な表現で、と説く主宰の言葉が甦る作品である。

半谷洋子　選

第一位　何もなき日
第二位　東京の鴎
第三位　桜隠し

http://www.haisi.com/koh/index.htm

羽音集

増成栗人　選

涼しさは寂しさに似て竹に雨　松戸　吉清和代

水差して熱湯騙す半夏生

風鈴にしづかな雨のひと日かな

草いきれ有刺鉄線続く径　船橋　藤原明美

踊子草口笛の近づいて来る

憩ふには棕櫚の葉蔭の涼しさよ

自在なる水母とすこし話しけり

葭雀日暮はものを見たくなる

空真青幹を離さぬ蟬の殻

雨三日塩効きすぎし胡瓜揉み　流山　中内敏夫

安曇野の風にたゆたふ青田かな

青田波一羽の鷺を隠しけり

あらぬ方じつと見てゐるサングラス

稜線をわがもの顔に雲の峰

ベランダを観覧席の遠花見

鳥一羽まだ実の紅き山桜桃

夕涼し縁台将棋の姉おとと　土浦　小林和子

紫陽花や磴百段の山の寺

血圧の折れ線グラフ新茶汲む

敷石は六角形よ苔の花